

小・中・高・大の英語教育の 一貫性を実現するために何が必要か

茨山良夫

本稿は平成13年度中部地区英語教育学会のシンポジウムにおいて筆者が行った提案の要旨である。その中で筆者は次の4点に言及した。1) レベルの違いを問わず学校における英語教育が共通に目指すべき目標は何か。2) 各学校種別の英語教育が重点を置くべき目標はそれぞれ何か。3) 現状における問題点は何か、またその原因は何か。4) 小学校から大学までの英語教育に一貫性を持たせるためにとくに必要なことは何か。提案の中で目標のモデルとして紹介した「全米外国語教育協議会による外国語能力のガイドライン」を付録として示す。

キーワード：英語教育、目標、つながり

1. はじめに

標記は平成13年度中部地区英語教育学会愛知研究大会におけるシンポジウムのテーマである。我が国の英語教育では、これまで「中・高・大の連繫を」ということが言われ続けてきた。それにもかかわらず、今日までのところ、このことが十分に実現されているとは言えない。中・高・大の連繫がなかなか実現できないのは何故か、実現を妨げているものは何か、実現するためには何をしなければならないのか、といった問題を改めて議論するというのがテーマ設定の趣旨であった。

ところで、今後小学校でも英語教育が行われるようになると、単に中学英語と高校英語とのつながり、高校英語と大学英語とのつながりといった局所的な問題を越えて、小学校から大学までの学校における英語教育に何らかの一貫性がなければならないであろうというのが筆者の認識である。筆者はパネリストの一人として、このような観点から私見を述べた。本稿はその要旨である。

2. どのような観点からの一貫性が求められるか。

小学校から大学までを見通して、これからの学校教育において一貫して追求すべき目標を求めるとすれば、それは、けっきょく、中・高などの学習指導要領に大同小異の形でかかげられている次のようなことからであるとするのが適切であろう。次の①～③は高等学校英語科の一般目標として新しい学習指導要領に挙げられているものである。

- ①英語を通じて、言語や文化に対する理解を深める。
- ②英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
- ③英語を通じて、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的

コミュニケーション能力を養うこと。

内容や技能のレベルは各学校の段階によってとうぜん異なることになるが、学校教育における英語教育が、段階の違いを越えて、一貫して目指すべき方向が上記には要約されていると思う。筆者の考え方を明確にするために、それぞれを少しずつ敷衍する。

目標①は、従来外国語学習の教養的価値と呼ばれてきたものである。高等学校学習指導要領の解説書には、上の記述に続いて、「英語や日本語、さらには、言語一般についての理解を深めたり、英語を使う人々の文化や日本の文化、さらには、文化一般についての理解を深める。(中略)ひいては、広い視野を持ち、国際感覚や国際協調の精神の育成につながる。」と述べられている。

英語教育が公教育の一つの教科として行われる以上、この側面が目標の一部を占めるべきは当然である。しかし、言語や文化についての理解を深めたり、国際協調の精神を育成したりすることは学校の教育が全体として目指すべきものであり、英語科はこれらのことがらと深く関連する教科ではあるが、英語科だけがこれを担うべきものではない。目標のこの側面に比重を置きすぎ、いわゆる英語教育の実用的価値を軽視したり、過去に行われた英語教育の存廃をめぐる論争においてともすれば見られたように、英語科の非能率についての社会からの批判に対する隠れ蓑にするようなことがあってはならない。①のような目標は、むしろ外国語を学習することを通じて、その結果として達成されるもので、教科の目標として前面に押し出しすぎるのは適当ではないと思う。

②の目標は、教育においては学習者自身や学習の過程にもっと目を向けるべきであるという新しい学力観に影響されて、1989年の改訂を機に正式に学習指導要領に登場してきたものである。筆者は「態度」ということをもう少し具体的なものとして捉えたいという考えから、「積極的に英語を用いてコミュニケーションを果たそうとする態度・習慣・スキルを身につけさせること。」と言い直すことにしている。「外国人を交えた場面で、英語を使うことを殊更らのことと考えず、日常的なルーティーンならば英語で用を足すことを当然視するような姿勢を身につけさせること、また、それが出来る程度のスキルを身につけさせること。」である。この場合の英語とは、頻繁に使われる定型表現や覚え込んだチャンクを中心とするものであって、次の③に挙げるような本格的な英語力のことではない。

目標③は、英語の語彙、文法など言語形式を習得し、それを使ってコミュニケーションの用が果たせる程度の能力を、段階的に、着実に身につけさせていくことである。目標②との違いが分かりにくいと思われるが、両者はJ.Cummins (1991) がBICSとCALPと呼んで区別しようとした外国語能力の違いにほぼ相当するものと考えると分かりやすい。白畑他 (1999) の記述によれば、BICS (basic interpersonal communicative skills) とは「日常生活など比較的具体的で、抽象度の低い伝達内容に関わる言語能力」を指すのに対して、CALP (cognitive academic language proficiency) とは「抽象的な思考が要求される認知活動と関連する言語能力」を指すとされる。目標②の英語力はできるだけ英語を使用する場を通して学習すべき英語力であるのに対して、目標③の英語力はどちらかと言えば体系的な学習を基礎として習得されるものである。

最後に、これは高等学校の学習指導要領には挙げられてはいないが、将来英語を自分の特技としたいというほどの者を対象として、ディスカッション、プレゼンテーションなど高度な英語技能を学ぶと共に、自分が将来進むであろう専門分野の英語 (ESP) を習得すること、というのを目標④として学校教育における英語教育の目標に加えたいと思う。もちろん、これは主として大学英語で達成すべき目標である。

3. 各学校レベルにおける望ましい重点の置き方

小学校から大学までを見通した学校英語教育が追求すべき一貫した目標を上のように捉えとして、各学校レベルではそれぞれどの目標を重点的に扱うべきかについて考えてみる。下の図はこの点に関する筆者の見解を視覚的に表現しようと試みたものである。

	小	中	高	大
①	——	——	——	——
②	----	——	——	——
③		----	——	——
④			----	——

①～④は上で挙げた四つの目標である。実線／破線の区別、線の太さ／細さの違いは、それぞれのレベルにおける扱いの軽重を表そうとしたものである。これをことばで表現してみると、おおよそ次のようになる。

- (1) 小学校の段階では、①の国際理解の側面を中心に進めるべきで、現在のような教育条件の下では、③は言うにおよばず、②もこれを欲張り過ぎるとまだ無理が生ずるであろう。
- (2) 日本の英語教育が全体として成功するためには、中学校の段階では、③を急ぐよりは②に重点を置き、ゆっくりとした着実なペースで進め、目標②の達成を図ることが必要であろう。
- (3) 高校の段階では、引き続き②の態度や習慣の育成を重視するとともに、目標③が目指す英語力を本格的に鍛え始める。しかし、くれぐれもオーバーペースにならぬことが大切である。
- (4) 大学の一般の学生には、高校英語との繋がりに配慮しながら、引き続きコミュニケーション能力の強化を図る。同時に、英語の語学力を特技として習得したい者には、将来社会に出て実用にたえるような程度の実践的英語コミュニケーション能力を習得する機会も提供すべきである。これが目標④である。

4. 現状の問題点は何か。それは何故生ずるのか。

学校教育における英語教育がどのような観点から一貫性を持つべきかについて一応の私見を述べた。このような観点から見た時に、現状にはどのような問題があるであろうか。

- (1) 小学校の試行的実践校では、概ね、英語や外国人に親しむことを通して国際理解の感覚を養うことを目標とした実践が行われており、問題はないようである。
- (2) 中学校段階でも、進学指導に偏した特殊なケースを除けば、全体としては、教材も指導法もあるべき方向に向けて改善の努力が続けられている。ただし、英語の使用を必然とするような学習環境も社会環境も現実には十分ではないので、目標②の追求はなかなか難しい。
- (3) 高校レベルの英語教育には次のような大きな問題がある。

- ・目標③の達成を急ぐあまり、指導する内容に無理があるので、生徒は常に消化不良気味である。中学校から学力差のついた生徒を受け入れ、出口では大学入試で高水準の学力を要求される。中に挟まれた高校教師には、たえず焦りがある。こういうことになるのは高校英語の具体的な到達目標について高一大の間に合意がないからである。
 - ・高校では③が重視されていると言っても、相変わらず知識の詰め込みや読むことの学習に偏しており、音声面の学習や表現力の養成がおろそかにされている。これは、一つにはコミュニケーション能力を習得しているか否かが実質的に大学入試で評価の対象となっていないからであるが、根本的にはコミュニケーション能力の育成ということが、かけ声だけで、高校教師の間で真にほんねの目標とはなっていないからである。
- (4) 大学の英語教育にも多くの問題がある。
- ・長く続いた一般教育制度の中で英語教育が形骸化してしまい、設置基準が大綱化された後は、「教養英語」の意義が確認されぬまま、弱体化・後退の一途をたどってきている。
 - ・教師が新入生の高校時代における英語学習の実態についてよく理解していないために、学生が全くレバンスを見いだせないような題材を取り上げたり、学生の語学力を遙かに越えた難解なテキストを教材として選ぶことがよくある。逆に、コミュニケーション能力が付いていないというので、慌てて日常英会話を教えようとしたりすることがあるが、これでは重点の置き方が高校英語と逆転していることになる。
 - ・週1回90分、年間30回という昔ながらの授業形態を崩さなければ、抜本的な指導法の改善は期待できないであろう。教員の採用についても、これまでのように英語関係の専門家だけにこだわらない柔軟さが必要であろう。

5. 一貫性を実現するために特に何が必要か。

上で見たような一貫性を実現するためには次のような事柄が必要であると思う。

- (1) 英語教育は学校教育の一環として行われるものであるから学校の教育目標達成の一翼を担うものであるが、英語科は将来国際化社会に生きる学習者達に国際語としての英語のコミュニケーション能力を習得させることを主要な目標とするのだということについて英語教育の関係者の間で基本的な合意を得ること。
- (2) 一般的な学習者が大学を終える頃までに学校の英語教育でどのようなコミュニケーション能力を習得させるかについて共通理解をもつこと。そして、この最終目標に至る道筋について、小・中・高・大の各段階でそれぞれどの程度の熟達度を達成すべきかを示す、無理のない、着実な、小学校から大学までを見通した長期的な指導計画を確立すること。各学校レベルの教育ではそれぞれの段階における目標の達成を目指し、上級学校への入学試験では厳格にこれに基づいた評価を行うこと。このことは、最近出された文部科学省の英語指導方法等改善の推進に関する懇談会の報告でも繰り返し強調されているところである。
- (3) このような指導計画を立てても画一的すぎて実際には機能しにくいかも知れない。むしろ、Swender & Duncan (1998) に報告されている The ACTFL Performance Guidelines for K-12 Learners (全米外国語教育協議会による幼稚園-第12学年学習者のための外国語能力ガイドライン) のような、学校種別とは独立した絶対的なコミュニケーション能力の発達基準を作り、それぞれの学校・学級などが生徒や学生の実状に合わせて、この基準のどのレベルを

到達目標とするかを決めるという方法の方が良いかもしれない。このガイドラインの作成者たちは、これを用いることによって、短期間の指導で非現実的な高いゴールを達成しなければならぬという教師のプレッシャーが軽減されるであろうとして、このガイドラインの有効性を主張している。到達目標に対するこのような柔軟な対応が我が国の英語教育でも受け入れられるかどうかは疑問であるが、参考までに対人的モード（聞くこと・話すことの技能）に関わる下位能力について述べられている部分を付録として示しておく。我が国の中学校・高等学校は Grade 7-12 に相当するわけだから、このガイドラインに従うなら、高校を終えるまでに中級レベルまでを達成すればよいことになる。

- (4) 基本的に、我が国ではカリキュラム開発に関する研究が不毛であると思う。それは学会の研究発表などを見ても歴然としている。学習指導要領という国家的な基準があるので、それと違うことを考えたり、主張したりしても実り無いと考えるからかも知れない。一貫した英語教育を実現するためには英語教師がカリキュラム論にもっと関心を持つべきであることを最後に指摘しておきたい。

6. おわりに

学校における英語教育は、中・高の学習指導要領に挙げられているような目標、とりわけ国際化社会に生きるためのコミュニケーション能力の育成ということを主要な目標にして、一貫して進められなければならない。中学校までの英語教育は概ねこの方向に沿って進められているように思われる。問題は高校以後の教育にある。高校以後の英語教育が望ましい方向に進んでいないのは、基本的には、コミュニケーション能力の育成ということを最終ゴールとした、中・高・大を見通した英語教育のカリキュラムが明確にされていないからである。大学入試が高校に対して過度の負担を課したり、偏った学力の測定しか行わないことになるのは、このためであると思われる。高校英語教育を正常化するためには大学入試の改善をさらに進めなければならない。とくに一点を挙げるならば、センター試験にリスニングの問題を30%程度出題すること、この一事だけで高校英語教育は飛躍的に改善されるであろう。

引用文献

- Cummins, J. Conversational and Academic Language Proficiency in Bilingual Contexts. *AILA Review* 8, 1991.
文部科学省審議会報告「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会報告」2001.
白畑知彦他「英語教育用語辞典」大修館書店、1999.
Swender, E. & Duncan, G. ACTFL Performance Guidelines for K-12 Learners, *Foreign Language Annals - winter 1998*, 1998.

付 録
 全米外国語教育協議会による幼稚園—第12学年学習者のための外国語能力ガイドライン
 (対人的モードの部)

入門レベル	中級レベル	準上級レベル
発表力：相手にどの程度よく通じるか。		
<ul style="list-style-type: none"> ● ごく身近な話題について、きわめて予測可能なやりとりを行うことができる。主として記憶された句・短文に依存する。 ● 主として外国語学習者とのやりとりに十分に慣れている人には理解される。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 身近な話題についてやりとりをする際に、文や文の連鎖を用いて自分の考えを表現することができる。 ● 外国語学習者とのやりとりに慣れている人には理解される。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 個人、学校、地域などに関する話題についてやりとりをする際に、現在時制および他の時制を含む連結された複数の文やパラグラフを用いて、物語ったり説明したりすることができる。 ● やりとり相手の相手に理解はされるが、まだ一定範囲の不正確なことは避いがあり、相手は時折メッセージを理解するのに特別の努力をしなければならないことがある。
<ul style="list-style-type: none"> ● モデルとして示された語や句を、モデルに似たイントネーションや発音を用いて 模倣することができる。 ● 話題が直接的なニーズの範囲を超えた場合に、言い間違えたり、不意に長い休止をしたり、母語に依存したりするしるしをみせることがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 外国語学習者とのやりとりに慣れている母語話者に通じるような発音やイントネーションの型を使うことができる。 ● 相手とのやりとりの際に、言い間違えたり、ことばを探してしばしば休止することがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 外国語学習者とのやりとりに慣れていない母語話者にも通じることができるような発音やイントネーションの型を使うことができる。 ● 自信をもって、容易に、あまり休止しないことばを使うことができる。
<ul style="list-style-type: none"> ● 短いメッセージやメモなど、限定された実用的な書くことのニーズを満たすことができる。ごく身近な話題について、既習の語彙や構文を組み換えて簡単な文を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 既習の語彙や構文を組み換え、短い手紙やメモなど、実用的な書くことのニーズを満たすことができる。現在の時制は完全に制御できるしるしを示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● パラグラフとしての長さや構成をもった説明文や物語文を書くことによつて、手紙や要約文など、実用的な書くことのニーズを満たすことができる。基本的な構文は持続的に制御できること、より複雑な構文や時制も部分的に制御できることを示す。
理解力：どの程度よく相手のことが理解できるか。		
<ul style="list-style-type: none"> ● 話したり書いたりする際に相手が実物、視覚教材、ジェスチャーなどを併用すれば、一般的な情報や語彙は理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● よく知っている話題について、また時にはあまり知らない話題についても、一般的な概念やメッセージは理解することができる。 ● よく知らない話題を扱う場合には、詳細は理解できないこともある。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 身の周りの場面だけでなく、さまざまな話題について、その要点や細部の殆どを理解することができる。 ● 時には細部について理解できないこともあるが、通常、相手に質問することによつて、詳細を明らかにできる。

<ul style="list-style-type: none"> ● メッセージを理解するために、場面的な手がかり、余剰性、パラフレーズ、繰り返しなどを通常必要とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 場面による文脈の助けがないと、ことばを理解するののに困難を伴うことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 抽象的な話題を扱う場合には、ことばを理解するのに苦勞することもある。
<p>ことばの制御力：ことばがどの程度正確か。</p>		
<ul style="list-style-type: none"> ● よく知っている文法構造を多く含むメッセージは理解できる。 ● 新たなことばを使おうとする場合に、正確さが減る。 ● 書かれたことばをコピーする時は正確に書くが、自力で文字を書いたり語を書いたりしようとするとき、勝手な綴りを使うことがある。 ● 目標言語の大文字の使い方や句読法が母語と違う場合、頻繁に誤りを示すことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ● ある程度の未知の文法構造を含むメッセージも理解できる。 ● 最も正確であるのは、現在時における身近な話題について、単文または複数の文を用いて新たなことばを使おうとする時である。 ● 新たなことばを創出しようとする度合いが増すにつれて、文法の正確さが減る。 ● 使い慣れた構文を新たな場面に適用することが始まる。 ● 目標言語を用いて何かを書くとき、大文字の使用法や句読法を意識しているのが分かる。 ● 文字の書き方や綴りに関して自分がおかす誤りに気づき、適切な修正を加える。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 未知の文法構造を含むメッセージを理解することができ。 ● 最も正確であるのは、現在時のことについて複数の文やパラグラフの形で物語つたり説明したりする時である。過去時や未来時のことになると、正確さが減る。 ● 引き続き不正確さを示すが、ことばの量や複雑さは増す。 ● 新たな場面に使い慣れた構文を適用することによってコミュニケーションに成功することができる。 ● 大文字の使い方や句読法にはめったに誤りをおかさない。 ● 文字や綴りには一般に正確である。
<p>語彙力：語彙の範囲と応用力はどの程度か。</p>		
<ul style="list-style-type: none"> ● 限られた数の身近な話題に関する日常的な事柄や行為に関連した語彙を理解し、使用することができる。 ● 語や句を、文法的な構造を意識することなく、主として語彙項目として使うことができる。 ● 他の教科に関連した語彙を含むさまざまな話題に関する語彙を理解し、使用できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● ささまざまなテーマ別の語群から語彙を選んで使うことができる。 ● 他の教科に関連した語彙を含むさまざまな話題に関する語彙を理解し、使用できる。 ● よく用いられる慣用的表現のある程度理解し、使用できることを示す。 ● なじみのある話題の範囲を超えたコミュニケーションを試みる際には、疑似同族語を用いたり、母語に依存したりすることがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 他の教科に関連した語彙を含むさまざまな話題に関する語彙を理解し、使用できる。 ● 慣用的表現や文化的に真正な表現を理解し、しばしばそれを使うことができる。 ● 限られた数の話題に関連してではあるが、特殊な、精密な専門用語を使うことができる。

コミュニケーション戦略：どの程度コミュニケーションを維持できるか。		
<ul style="list-style-type: none"> ●自分のメッセージを伝えるために、語を繰り返したり、場合によっては代わりの語を選んだりして、意味を明確にしようと試みる。 ●理解に問題があることを示すために、主として顔の表情やジェスチャーを使う。 	<ul style="list-style-type: none"> ●コミュニケーションの不成立を避けるために、パラフレーズ、質問、延言的表現、その他の戦略を使うことができる。 ●コミュニケーションが成立しない時は、主として意味を正しく伝えられるよう自動修正を試みる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●議論の話題が個人的な経験や直接的なニーズに関係する時には、さまざまな戦略を用いて母語話者とのやりとりを持続させることができる。 ●機械的な誤りがコミュニケーションを妨げないような場合にも、誤りに気づいているというしるしを示す。
異文化に対する理解：異文化に対する知識がどの程度コミュニケーションに反映しているか。		
<ul style="list-style-type: none"> ●文化的に適切な語彙や慣用的な表現を模倣することができる。 ●目標言語のジェスチャーや身振りが記憶された反応に組み込まれていない場合には、自分の文化に属するものを使おうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●文化的に適切な語彙や慣用的な表現をある程度使うことができる。 ●目標言語のジェスチャーや身振りをある程度使うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●文化的に適切な語彙や慣用語を使うことができる。 ●目標言語の適切なジェスチャーや身振りを使うことができる。
対応すると考えられる教育プログラム		
Grade K-4 / Grade 5-8 Grade 9-10	Grade K-8 /Grade 5-12 Grade 7-12 /Grade 9-12	Grade K-12

*本表は筆者の訳出による。

Providing More Consistent Linkage in English Language Education at the Elementary School Level through the College Level

Yoshio Ibarayama

This is an outline of what the present author contributed to the symposium which took place at the 2001 annual conference of the Chuubu Society of English Language Education. In his presentation, the topics covered by the author included: 1) at what general goals should English language education at all school levels commonly aim; 2) on which of these goals should English language education at each respective level focus its concentration; 3) what are some of the problems which exist in present day situations and their principal causes; and 4) what will be particularly necessary to bring about more consistent linkage in English language education.

Key words : English language education, goals, linkage